

報告書名：義歯装着患者の咀嚼機能回復が QOL に及ぼす影響

研究者名：細井紀雄<sup>1)</sup>，鶴本明久<sup>2)</sup>，東條敏明<sup>1)</sup>

所 属：<sup>1)</sup>鶴見大学歯学部歯科補綴学第一講座，<sup>2)</sup>鶴見大学歯学部予防歯科学教室

## ．目的

部分床義歯装着患者に対して QOL 質問紙を用いてアンケート調査と咬合力測定を行い，義歯装着による咀嚼機能の回復や残存歯数，残存歯による咬合保持の有無と QOL との関係について検討した．さらに質問紙における尺度構成について統計学的検討を加え，部分床義歯における QOL 質問紙の開発とその信頼性の確認を行った．

## ．研究対象と方法

対象は本学歯学部附属病院に来院した部分床義歯装着患者で，実験の主旨を説明し理解の得られた 100 名（男性 41 名，女性 59 名，平均年齢 63.3 歳）である．質問紙は機能，会話，審美，活動性，心理に関する 5 要因 66 項目で構成した．各質問は 5 段階評価とし，要因ごとに合計し，各要因間で比較を行った．咬合力の測定はデンタルプレスケールを用いた．質問紙の開発は主因子法による因子分析を行い，さらにバリマックス回転を行って因子の抽出を行った．次に因子の意味づけを行い，尺度構成を行った．さらに内的整合性を検討し，最終的な質問紙の作成を行った．

## ．結果と考察

### 1．年齢，残存歯数，咬合力増加率と各要因間の比較

年齢と残存歯数との間には負の相関が認められ，加齢と共に残存歯が少なくなることが示された．年齢と各要因との間には正の相関が認められ，加齢とともに義歯に対する不満の度合いが高くなることが示された．残存歯数と咬合力増加率の間には負の相関が認められ，残存歯数と各要因の間にも負の相関が認められた．このことから，残存歯数が少なく大きな義歯を装着している患者ほど咀嚼機能は向上する反面，患者の義歯に対する不満の度合いが高くなることが示された．

### 2．残存歯による咬合保持の有無と各要因間の比較

全ての要因において，残存歯による咬合の保持のない群がある群に比較して得点が有意に高くなった．この結果からすれ違い咬合に代表される残存歯による咬合保持のない義歯装着患者では，義歯に対する不満や困りごとが多くなることが示された．

### 3．因子分析

因子分析を行った結果，部分床義歯装着患者の義歯に対する不満を構築する要因を機能的因子，会話的因子，審美的因子，活動・心理的因子の 4 尺度に分類し，28 項目の最終的質問事項を決定した．内的整合性の検討を行った結果，Cronbach の信頼係数は 0.8 以上となり，高い内的整合性があると考えられた．